

昭和9年 小熊を生け捕りにした話

「日吉小学校PTAだより くまがわ第5号」(昭和59年3月) 掲載

\*注：平間さんが語ったことをテープ起こしたような文になっているため、繰り返しや省略、話が飛ぶ箇所がいくつもあります。ここでは原文を損なわない程度に読みやすく編集しています。

私が熊を捕ってきたのは、昭和9年4月22日でした。その時、ヤマベ釣りが好きなもので、学校の沢へヤマベ釣りに行きました。

今と違って、その頃はたくさん雪がありました。川の瀬のきついところには雪はなく、木詰まりやなにかのところにたくさんヤマベが住んでいました。そのヤマベを釣るために家からリュックを背負って、ヤマベ釣りの道具を持って釣りながら、ほとんど登って行きました。そうして奥へ行くと二股になり、そこに行ってから右の沢へ曲がって下りていきました。そうしたところが、段々雪が多くて釣るところがなくなったので、お昼も近いのもう家に帰ろうと思って、沢を登って行きました。

すると子連れの熊の足跡が残った雪の上にたくさんありましたので、「こりゃあ子ども連れの熊がずいぶん歩いたもんだなあ」とそう思いながら、どんどん登ってもう少しで上に着くという瞬間、大きな雪だまりのあるところまで行ったところ、その前の笹の裏からガサガサといったと思ったら、パッと熊が、大きな熊が立った。爪を広げて飛びついてくるような恰好をして、本当に飛びついてきましたから、私は右へ一歩踏んで避けたところに手が引かからず、親熊の股が私の肩に当たりまして、それで倒れましたけれども、熊も急斜面のために1回では止まれなくてもう1回飛ぶ。私は身も効き、すぐ起きて「わあっ」と大きな声を出したところ、熊は右の方に切れ、区切りがあった陰に行ってしまった。

そうしている内に、その親熊の出てきたところから小熊が出て来ました。親がいなくなって私がいるもんだから、親と間違ったらしく私の方を向いてどんどん来る。「こりゃ変なものだな。親が転がっていったけど、すぐ下から回ってくるのではないか」と思いまして、雪だまりの上に登ったところ、小熊はどこまでも私の後をついて歩く。2・3回まわったけれどどうしてもついてくる。これじゃ親熊が来ると思い、親熊の音を聞くために被っていたスキー帽を後ろからまくり上げて耳を出しました。ところが親が来そうでもないし、小熊はついて歩く。それで、雪だまりの下の方に3本の細木がたまっておりまして、1番太いやつに登ってみました。1メートル50センチくらい登ると細くなる。登りやすい。1メートルくらいのところに足をかけるいい枝がありましたから、そこに足をかけてようすをつかっていましたところ、小熊が登ってこようとす。そうすると細木なので爪がかからない。そうしている内に、小熊はくるっと木に手を回して後ろ足でかっちやいて上がって来た。すぐ私の足のところまで来てしまう。そんなものはけつとばせば心配ないんですけれども、ずっと前にアイヌから「熊をいじめたらダメだ。いじめたら、小熊を泣かしたらすぐ親が来るから」と、そういう話を聞いたのを思い出しました。けとばせば小熊が何とか言っ、そうして親熊が来たら大変だと思っている内に、小熊はもう足のところまで上がってきて、セーターにチョッキを着ていたので、そこに手をかけてがりがりとして上

がっちゃって背中に戻ってきた。子熊がズボンのバンドに後ろ足をかけて前の足は肩にかけていたもので、耳が危ないと思ってスキー帽を下ろし、周囲をうかがっていたけれど親熊は来そうにない。こりゃ、何とかこの子熊を連れて帰らなきゃダメだと考えました。

下の雪だまりには釣ったヤマベ20匹くらいとびく、竿、リュックを置いている。親熊がきて、それをちょしているうちに何とかしよう（ちょしているうちに何ともできないんですけど）そんな考えで置いていました。

そこへ木から下りて、「こりゃ、どうしても連れて行かなきゃダメだ」、ただ連れて歩くわけにもいかんからリュックに入れようとしたけれども、1人なのでなかなかリュックには入れづらい。それで、4本の足を片手でつかんでリュックを開け、リュックに入れると何とかかんとかすぽっと入った。だが、がっちりリュックの口をしばると息をするのに苦しくなって鳴くからうまくない、少し口を開けて手がようやく出る程度にしてしまいました。

今度はずっと右の裏の川へ帰れば遠くてぬかるので、右へ上がって家の裏へ帰ろうと判断して、親熊がおったところからさらに上を向いて上がって、親熊が逃げた方を見たら親熊がおるわけ。親熊は私の姿を見て一目散に山奥へ逃げていった。

それを見届けてから、沢の裏の方へ、その峰をどんどん帰ったけれども峰ばかりで、家までだと遠いので、境さんのところへ下りようと途中から境さんの裏へ向いて下っていきましました。日当たりなものですから雪はないし、笹ばかりだけれど幸い短いので、まあ歩きやすかった。そこで、どんどん行って沢を下りて道路に出た。そうしたら道路の淵で境のおじいさんが木を倒して薪を刻んでおった。ここまで来たからまあ一安心とまず腰をかけた。

境…何だ平間さん、何しよってんだ。

私…山に犬の子おったからしよってきた。

そのうちに熊がリュックから手を出した

境…平間さん、その手は犬ではないぞ、犬と違うぞ。

私…そうかな、犬の子だと思ってしよってきたんだけど。

境…そりゃ、おまえ違う。その手は違う。

そう言われて、境さんに本当は熊の子をしよってきたんだと、今までのことを申し上げ。「何とか、あんたの家に犬の首輪はありませんか」と訊くと、「家にはない。今井さんに行ったらあるんでないか」と言うので、今井さんへ行って訊いてみたら、「家で犬を飼ったことはあるけれども首輪はない。山本さんに行けばあるから、そこへ行けば間違いなくあるから、そこで借りなさい。お前、何に要るんだ」と。「いやあ、犬の子を拾ってきたから、首輪をかけて連れて行くと思うんだ」と私。

そこでまあウソを言ったことになるんだけど、その今井さんの子どもたちが出てきて山本さんへ案内するからと言ってついてきた。

今度も私が山本さんに訊いたら、「ああ家にありますよ」と。そして、「平間さん、何をするんだ、犬の首輪を」と訊くので、「いや、山で拾いものをしたから首輪をつけて連れて行くんだ。家には首輪がないから、ここに あるという ことを今井さんに聞いたからきたんだ」と答えると、さっそく奥に行つて首輪と鎖を持ってきてくれた。リュックから熊の

子を出して首輪をつけたら犬の子どころじゃない、それこそ熊の子だから子どもたちはみんな喜び、騒ぎ出す。そうしているうちに山本さんが、「平間さん、腹すいただろう。今、餅焼いてあげるから」って。「いやいや、もう家が近いからいいですよ」と言っただけで、「いやいや、山歩いたんだから、そんなことしたんだから腹すいただろうから餅焼いてあげるから」って。餅は、イナキビであんこを包んでいるのを4つか5つ焼いてくれ、まずごちそうになりました。

子熊は、家の傾きの突っ張りにしてあった木に縛っておいたが、熊は喜んで木を上がったり下りたりする。それを見て子どもたちは喜んで騒いでいる。これは困った、うまく歩いて家まで帰ってくればいいが、山に帰ろうとしたら困るなど心配したけれど、子どもが先に行けば後をついてくる、もう縛らなくてもけっこうなくらいなもの。そうやって家まで連れて帰った。帰ったら、家でもたまげちゃった。ヤマベ釣りに行った人がこんなものを持ってくる、そういうことで家でもたまげて、そんなことをしていると隣近所、子どもたちが騒ぐもんだから、なんだかんだって騒ぐ。

私は仕事場を家にこしらえており、いろいろな頼まれたもの、箱やせいろをこしらえたりする道具なんかを置いてある。廊下が4尺と狭く、仕切りに障子を立てている。

熊は削り台の脚に縛って1晩過ごした。朝起きてみたら障子の骨が1つも無い。熊が上がったとしたら障子だものどうしようもない。

子熊は1ヵ月置いたけれど、最初の晩に何か食わせなきゃこりゃ困ると思ったけれど、こっちは知らないし、アイヌのばあさんがおったのでわざわざ訊きに行った。そうしたら、「平間さん、いっぺんには食うようにはならんぞ。だが、おかゆをうんと柔く炊いて、砂糖を入れて甘くしてやらんきゃだめだ。甘くして米粒のないようなおかゆを炊いて冷まして、やけどをせんように冷まして、それをスプーンですくって熊の口を開けて2・3回突っ込めばそれで飲む。そうやって3・4回したら自分でなめるようになるから心配ない、そうしなさい」と言う。

それを教えられてきたから、そのようにした。なるほど、初めは口も開かんし、口を犬の口みたいに両方から開けて、スプーンに入れてつついてやると、まあこくりと飲む。そんなことを3・4回続けたら、今度は洗面器に自分で頭を入れて自分でなめるようになった。もう心配ない。これなら大丈夫だ、そう思った。

今度は夜、寝せるのにここではダメだ。家にはたくさん角材を集めている。今でいうだいたい2メートルの角材。それで井桁を組んで下にびっしり並べ、棒を1本おきに井桁を組み、上もびっしり並べてその中に入れた。そしたら夜は。「ワアーワアー」と鳴くんです。そうしたら家内に「父さん、熊の鳴き声聞いて親が来たらどうしますか」って叱られて、「親なんか来るもんでないさ、今来ないから」と言っただけで、そんなふうにまああった。

そうしてしばらくいると、熊の子は相撲を取るのが大好きなの。ところが相撲を取って負ければ負けたってかかってくるし、勝てば勝ったでかかってくるし、そして本当に熊ちゅうやつは向こう見ず、こうやって座っていても人の前には必ず来る、相撲をやらんとすると怒るわけ、一度なんかは足を浮かしていると、その下にもべろうとする、もべろうとするとともべらせばいいの、もべらせまいとすると怒るんだ。べうでもこうでも思ったことを通す、そういう性質なのが熊ですね。

その頃、バスは今みたいに1日に何回も通らない、午前中に1回、午後から1回、常呂へ往復するバスがあった。その運転手が聞きつけて、往復のたびにお客さんを連れて寄っていくので仕事にならん。お菓子だのアメ玉とかみんな持ってきてくれる。熊にやる、子どもにやるっていうんで仕事にならん。喜んだのは子どもだけ。また、子熊を捕ってきたのはどこにおって、どうやったのか、みんなに訊かれるんで、その説明をしなきゃならん。仕事にならん。こんなこと繰り返しておったら困ったもんだな。

そうこうしているうちに今度は熊の買い手がやってきた。北見からも来た。帯広からも来た。1番高く値段を付けたのは網走から来た見せ物をやっている人だという。

当時、大工の出面が1円50銭の時に、「30円で分けてくれ」「50円で分けてくれ」って。見せ物やってたという人は70円という値段だったけれど、私は金額では売らんかった。「命の恩人になっているんだから売らない、あげますよ」って言ったが、「もうわけにはいかん」と。

そうこうしているうちに、阿部すけたろうさんというおじいさんがおった。物好きなおじいさんで、この人が「平間さん、売らんちゅうんだから私にくれませんか」と言う。「ああ、あんたが飼ってくれるならあげますよ」と言う、「私が飼うんじゃない、獣医さんにやるんだ」と。仁頃の獣医のおじいさんが熊好き、生き物好きだったらしい。そこで、おみやげに持って行ったらしい。

ところが、こっちはもらっていかれたから何の心配もなかったんですけれども、獣医さんのところは治療のために馬が来るけれど、馬が熊の匂いがあるので暴れて治療をさせない、せつかくもらったのにそんなことじゃ商売の妨げになる、困った困ったということになった。

そんな時に、北見の「におう」さんという精米工場のおじいさんが現れ、獣医さんはおうさんに子熊をあげたわけ。

そこは精米工場なので食い物には心配ない。におうさんでは3才まで置いた。3才まで置いたら体は大きくなって心配になってきた。食わせることはいいけれども、もしや人に危害を加えんうちに熊祭りをするからと、新聞も出ましたし、案内状も来ました。

まあ行かんかった。そうしたら熊祭りは何とかかんとかして、処理したらしかったんですが、そのようなことでありました。

＊注：「手師学の思い出」という文で、第5代手師学尋常高等小学校校長が、昭和12年の春から昭和15年の春までの在任期間の思い出として、平間さんの兄弟が子熊を捕ってきたこと、その子熊を見て、子犬くらいの大きさだったことを書いています。平間さん自身の文とは年月や兄弟などいくつかの違いがありますが、互いの記憶の違いを除けば内容はどちらも本当のことだと思えます。ふしぎで珍しい体験話には違いありません。